

現代語「ばかり」の用法の多様性について

—動詞（句）＋「ばかり」を中心に—

朱琳（名古屋大学大学院）

要旨

本稿は、現代語「ばかり」が動詞（句）に接続する場合の用法について、詳細に記述・分析した。

本稿では、「スキヤニング考察」という概念を用い、スキヤニング考察の結果とスキヤニング考察の領域にある要素の配列に注目する。そして、従来の「とりたて」「程度」「アスペクト的用法」の三つに分類する方法を避け、動詞（句）に後接する「ばかり」のあらゆる用法を新たに分類。その結果、動詞（句）に後接する「ばかり」の基本的な用法を、複数性明示用法、高程度指示用法とアスペクト的用法とした。それ以外に派生的な用法として「限定用法」をはじめとする様々な用法を位置づけた。また、各基本的な用法の成立条件は、スキヤニング考察の結果の違いと、スキヤニング考察の領域にある要素の配列の違いによるということを論証した。さらに、各用法の様々な連続性を明らかにした。

1. はじめに

現代語「ばかり」の諸用法についての先行研究の蓄積は大きいですが、その分類方法や分析対象とする範囲などは異なっている。先行研究をまとめてみると、「ばかり」の用法はとりたてて用法（例1：雨ばかり降る）、アスペクト的用法（例2：引っ越してきたばかりだ）、程度用法（例3：リンゴを三つばかり買う）の三つに大別することができる。しかし、その三つの用法の境界や連続性は明確とは言えない。また、先行研究には、この三つの用法を個別に研究したものが多い。とりたてて用法とアスペクト的用法、とりたてて用法と程度用法をそれぞれ合わせて研究したものはあるが、三つの用法を一括して扱った研究はごくまれである。管見の限り、沼田（2000）（2009）だけである。しかし、沼田も言及するにとどまり、詳しく研究されていない。さらに、「ばかり」には「ばかりに」「ばかりか」など派生的な用法が多い。これらの用法と「ばかり」本来の用法の関連などもまだ明らかではない。そこで、本稿では「ばかり」の三つの用法及び諸派生的用法を一括して見ることにする。また、「ばかり」の用法を三つに分類する方法を避け、「ばかり」のあらゆる用法を新しく分類し、各用法の連続性も明らかにしたいと考えている。

2. 研究方法

本稿では、「スキヤニング考察」という概念を使用する。

まず、「スキヤニング考察」という概念を使用するには、その前提として「集合」（庵 2001、定延 2001、張 2010 など）という概念を導入しなければならない。例えば、文「みかんばかり食べる」は、食べる対象が「みかん」に限られ、ほか（例えば「りんご」「バナナ」）はないということを表す。つまり、食べられる候補が集合（みかん、りんご、バナナなどを含む）を成して想定とされている。食べられる候補の集合のなかで、「みかん」は何回もとりたてられ、「りんご」「バナナ」はとりたてられていない。このように、「みかん」は「ばかり」がとりたてて

対象である。これを「スキヤニング考察の対象」と呼ぶことにする。また、何を食べるか？という質問に対する答えの集合（中には「みかん」「りんご」「バナナ」などがある）を「スキヤニング考察の領域」と呼ぶことにする。さらに、「りんご」「バナナ」などは「ほかの要素」¹と呼ぶ。

つぎに、スキヤニングという概念について説明しよう。スキヤニングを言語研究に持ち込む研究方法は、数多くの先行研究で使用されている。例えば、定延（2001）（2003）、澤田（2007）などである。定延（2001）では認知的な情報処理として探索の定義²を提示しており、「ばかり」による探索はスキヤニング探索³であると指摘している。また、澤田（2007）が使用している走査⁴の概念は定延（2001）の探索の定義と同じ立場をとっている。しかし、定延（2001）（2003）は、「ばかり」のいわゆるとりたて用法についてしか言及していない。また、澤田（2007）は、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法についてしか言及していない。本稿では、スキヤニングの定義と、この概念を用いる点で先行研究と同じ立場をとるが、一用法にとどまらず「ばかり」のあらゆる用法について分析する。また、新たに「スキヤニング考察」という用語を用い、以下のように定義する。

スキヤニング考察とは、スキヤニング考察の領域の中の要素を、一つずつ（そして場合によっては何回も）とらえていく方式の考察である。

また、上記の例文「みかんばかり食べる」で行ったように、「スキヤニング考察」を行うためには、まず課題⁵「何を食べるか？」を提示し、それから「みかん」「りんご」「バナナ」などを含む「スキヤニング考察の領域」についてスキヤニング考察を行う。つまり、まず例文について課題を提示し、その後スキヤニング考察を行うわけである。また、発話時、スキヤニング考察は話し手や聞き手により、無意識に行われている。本稿では、この瞬時に複数回行われているスキヤニング考察の過程を詳しく分析し、「ばかり」のあらゆる用法を記述説明する。

3. 考察

分析対象として、『新潮文庫 100 冊』CD-ROM 版の用例を使用する。

「動詞（句）＋ばかり」については、用例が数多く見られる。本稿では、動詞（句）に後接する「ばかり」の形態を、以下のようにわけるとする。

¹ 張（2011）でも、同じ「ほかの要素」という言葉を使用しているが、張（2011）で使用している「集合」は「だけ」の上接する語句の成す集合である。「ほかの要素」はその集合の中の「対象要素」以外のものである。それに対し、本発表で用いる「ほかの要素」は「スキヤニング考察の対象集合」にある、「スキヤニング考察の対象」以外のものであり、張（2011）とは定義が異なる。

² 定延（2001）では、「探索とは既知領域の拡大行動である。典型例を言えば、未知の空間がどんな様子なのか調べることである」（p.118）と定義している。

³ 定延（2001）では、探索は「全体的探索とスキヤニング探索に二分される」とし、「スキヤニング探索とはスキヤニングを用いる探索である。スキヤニングとは、全体を一挙にとらえるのではなく、一度に一部分ずつとらえていく方式の行動である」（p.120）としている。

⁴ 澤田（2007）では、「連続走査」を「時間概念を状態の連続の中に組み込むこと、つまり展開された状態の連続を時間順で追っていくこと」と定義している。また、自身の説を「基本的に定延（2001）の立場をとるものである」（p.134）としている。

⁵ 定延（2001）では、「探索課題」（p.119）としているが、本稿では「課題」と呼ぶことにする。

- ・ 辞書形⁶＋ばかり（V んばかりを含む）
- ・ タ形＋ばかり
- ・ テ形（ているも含む）＋ばかり：
 - ・ V てばかりいる
 - ・ V ているばかりだ

以下、形式ごとに考察していくが、結論を先取りすれば、「ばかり」の行うスキニング考察はいずれの用法においても「最大限」「複数回」行われていることがわかった。その複数回のスキニング考察において、「ばかり」の接続する語句の示す対象領域の要素のあり方によって、用法が分化していると考えられる。

3.1 「辞書形＋ばかり」

3.1.1 複数性明示用法

「辞書形＋ばかり」については、以下のような用例が見られる。

- (4) 「心当たりは？」「さあ」と首をひねるばかり。（赤川次郎『女社長に乾杯！』）
- (5) 同じ姿勢のまま、ただ首を左右にふりつづけるばかりである。（安部公房『砂の女』）
- (6) 綱ひきや相撲が効を奏したこともあるが、肉体に訴えるばかりが手段ではない。（開高健『裸の王様』）
- (7) こうして、充たされた人生を謳歌するばかりの人々の中で、紫の上は、ある日、微笑みつつ、源氏にいった。（田辺聖子『新源氏物語』）
- (8) 士気は高まるばかり、軍規もまったく乱れないのが、若い主人の後に馬で従うトルサンには、眼を見張るばかりの驚きだった。（塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』）
- (9) ますます矢須子に対して負目を感じるばかりである。（井伏鱒二『黒い雨』）
- (10) それからがくがくして歩行くのが少し難渋になったけれども、此处で倒れては温気で蒸殺されるばかりじゃと、我身で我身を激まして首筋を取って引立てるようにして峠の方へ。（泉鏡花『高野聖』）
- (11) それにこの雨は米を腐らせるばかりやのうて、川も荒すし、流行病を跳梁させてますがや。（有吉佐和子『華岡青洲の妻』）
- (12) みんなの耳にジャズ・バンドが未だに響いているらしく、誰か一人が或るメロディーを唄い出すと、男も女も直ぐその節に和して行きましたが、歌を知らない私には、彼等の器用さと、物覚えのよさと、その若々しい晴れやかな声とが、ただ妬ましく感ぜられるばかりでした。（谷崎潤一郎『痴人の愛』）

例(4)では、「ばかり」のスキニング考察の対象は「『さあ』と首をひねる」である。心当たりはあるかと聞かれたらどう反応するか？という課題に対し、考えられる反応の数々、つまりスキニング考察の領域について、一回スキニング考察をすると、結果は「『さあ』と

⁶ 「ばかり」の前の動詞の形を連体形と呼ぶか終止形と呼ぶかは、「ばかり」を体言とみなすか否かによって決まる。本稿では、「ばかり」を体言とみなしてよいかどうか、まだ答えを示すことができない。そのため、そういったことに関係しない日本語教育の用語である辞書形を、便宜的に使いたい。

首をひねる」であった。次に聞かれたらどう反応するかはわからないので、時間が経ってからもう一回スキヤニング考察をすると、結果は同じく『さあ』と首をひねる」であった。何回スキヤニング考察をしても、結果は『さあ』と首をひねる」にたどり着くということを示す。

例(5~7)も同じである。スキヤニング考察が何回行われても、結果はスキヤニング考察の対象「ただ首を左右にふりつづける」「肉体に訴える」「充たされた人生を謳歌する」にたどり着く。このような「ばかり」の用法は、従来、とりたて用法と呼ばれている。しかし、例(4~7)を見てみると、「ばかり」は、スキヤニング考察の対象をとりたてているというより、最大限、複数回のスキヤニング考察の結果の一致を強調しているといったほうが妥当だろう。例えば、例(4)では、筆者が強調したいのは、反応がほかのものでも『さあ』と首をひねる」ということでもなく、いつも反応が『さあ』と首をひねる」だということである。例(5)では、「首を左右にふりつづける」というデキゴトは実際に複数回行われたという解釈ができる。つまり、示されているのはスキヤニング考察の複数性の明示である。したがって、本稿では、例(4~7)のような用法を「ばかり」の複数性明示用法とする。

また、「だけ」と「しか」のように、スキヤニング考察の対象を限定しているのと違い、「ばかり」はほかの要素を許容できる点は重要である。例えば上で説明したように、例(4)では、一回くらいほかの反応(例えば無視する)が混ざったとしても、『さあ』と首をひねるばかり」と言える。つまり、「ばかり」はゆるいとりたてを表していると言えよう。先行研究でも、定延(2001)が、『ばかり』は夾雑物を許容しやすい(定延2001)と述べている。論者による「ばかり」の複数性明示用法の定義づけと先行研究の定延(2001)の記述は衝突せず、立場が一致している。

また、「辞書形+ばかり」の「ばかり」が複数性明示用法で使われる時、下に「で」、「が」や「だ」「である」などが来る、または文の終わりに位置する用例が圧倒的に多い。「の」が下接する用例はごくわずかである。「辞書形+ばかり+述語」のような用例では、「ばかり」が複数性明示用法で使われている用例は見当たらなかった。すなわち、「辞書形+ばかり」は文の中で主語または述語をなす強い傾向がある。

例(8)では、「ばかり」が二回使われているが、一回目の「ばかり」に注目する。士気はどう変わるか?という課題に対し、スキヤニング考察が何回行われても、結果は「高まる」にたどり着く。例(9)では、スキヤニング考察が何回行われても、結果は「ますます矢須子に対して負目を感じる」にたどり着くと解釈して矛盾がない。よって、例(8)(9)の「ばかり」の用法は複数性明示用法といえる。また、例(8)(9)における「ばかり」のスキヤニング考察の対象はすべて、変化を表す動詞である。このような用例では、「ばかり」の意味は「一方」と同じである。例えば、例(8)の「士気は高まるばかり」は、「士気は高まる一方」と同じ意味である。また、このような用例が数多く見られる。

例(10~12)でも、スキヤニング考察が何回行われても、結果はスキヤニング考察の対象「蒸殺される」「腐らせる」「感ぜられる」になるといえる。したがって、例(10~12)の「ばかり」の用法も複数性明示用法である。また、例(10~12)のように、ヴォイス(受身、使役)や自発を表す「せる」「れる」などが「ばかり」に上接する用例には用法の偏りが見られる。「動詞辞書形+使役/自発+ばかり」の用例は、ほぼ複数性明示用法である。「動詞辞書形+受身+ばかり」の場合、半数程の用例が複数性明示用法である。

3.1.2 限定用法と「ばかりか」

「辞書形＋ばかり」については、以下のような用例も見られる。

(13) 確実なものの直観があるばかりでなく、不確実なものの直観があるように思われる。(三木清『人生論ノート』)

(14) しかも、どなるばかりか、煙草をすっている。ほくたちをばかにしている証拠だ(海外作品ドストエフスキー『罪と罰』)

例(13)では、「ばかり」の接続形式は「辞書形＋ばかり＋でなく」である。スキヤニング考察の対象は「確実なものの直観がある」で、ほかの要素は「不確実なものの直観がある」だから、複数性明示用法と解釈できる。しかし、「確実なものの直観があるばかり」で明確に排除された「不確実なものの直観がある」も、文の後半に提示されている。このようなことができるのは、「でなく」という統語的条件があるからである。また、一回「ばかり」で排除されたほかの要素を、もう一回提示することにより、スキヤニング考察の対象とほかの要素を対比している。結果的に、例(13)の「ばかり」が表しているのは、複数性の明示ではない。ほかの要素「不確実なものの直観がある」の排除、すなわち、スキヤニング考察の対象「確実なものの直観がある」の限定性を表していることになる。

本稿では、とりたてと限定を違う概念として扱っている。とりたての意味は宮田(1948)⁷で定義された意味に従う。限定は、仁田(2009)⁸で定義された意味に従う。すなわち、とりたては文中の要素をとりたてるのに対し、限定は文中の要素をとりたて、ほかの要素を排除する。つまり、とりたては広義の意味として扱い、限定は狭義の意味として扱う。

したがって、例(13)では、否定「でなく」と、「ばかり」で排除されたほかの要素の提示という二つの統語的条件があるので、「ばかり」の用法は複数性明示用法というより、限定用法といったほうが妥当だろう。このような用例が「ばかり」の用例全体の中で7%という低い割合を占めている。また、例(13)では、「ばかり」は「だけ」と入れ替えることができる。中西(1995)では、このような「ばかり」の用法をばかりの単機能とし、単機能を表す「ばかり」は「だけ」との互換性があると述べている。本稿の主張は中西(1995)の意見と一致している。本稿では、「ばかり」の限定用法を「ばかり」の本来の用法としては扱わず、「ばかり」の派生的用法だと考える。なぜなら、以上のような二つの統語的条件がなければ、限定用法は成り立たないからである。

例(14)では、「ばかり」の接続形式は「辞書形＋ばかり＋か」である。スキヤニング考察の対象は「どなる」であり、ほかの要素の一つが「煙草をすっている」で、複数性明示用法と解釈できる。しかし、例(13)と同じく、「どなるばかり」で明確に排除された「煙草をすっている」は、文の後半に提示されている。このようなことができるのは、文の前半に否定また逆接があるからだと考えられる。「か」は従来、疑問を表すといわれる。例(14)において、文の前半では、「か」を使用することで「どなるばかり」について疑問を投げかけ、文の後半

⁷宮田(1948)では、「取り立て助詞というのは文または句の一部を特に取り立てて、その部分をそれぞれの特別の意味において強調する助詞である」(p.178)と定義している。

⁸仁田(2009)では、限定は「文中のある要素をとりたて、その要素が唯一のものであることを示し、同類のほかのものを排除するという限定の意味を表す」(p.45)と定義している。

では、「煙草をすっている」を提示することでスキヤニング考察の対象「どなる」を否定している。よって、例(14)では、「か」は「否定」あるいは「逆接」を示すといえよう。つまり、例(14)の「ばかりか」は「か」が否定または逆接の意味を表していることによって、例(13)の「ばかりでなく」と同じように、限定用法を示している。

例(13)で、限定用法が成り立つのは、「ではなく」などの否定と、「ばかり」で排除されたほかの要素の提示という、両方の統語的条件があるからである。例(14)でも、「ばかり+か」の表す否定や逆接と、「ばかり」により排除されたほかの要素の提示という二つの統語的条件がある。したがって、例(14)も例(13)と同じく、スキヤニング考察の観点で解釈するより、限定用法で解釈したほうが適切である。

また、本稿では、「ばかりか」を「ばかり」から派生した新しい表現だと考えている。これは先行研究と立場が一致している。「ばかりか」の用法は、「ばかり」の用例全体の中で4%という低い割合を占めている。さらに、例(13)のような用例では、「ばかり」は「だけ」と入れ替えることができるが、類似する例(14)のような用例では、「ばかりか」は「だけか」と置き換えられない。すなわち、「ばかりか」は、「ばかり」とは、異なる定型の、別の語彙項目になっている。したがって、本稿では、「ばかりか」を「ばかり」から派生した表現として扱う。

3.1.3 アスペクト的用法

「辞書形+ばかり」については、以下のような用例も見られる。

(15) 騒ぎだったわね、せっかく自分のために家を建てさせておいて、いざ入るばかりになった時に、蹴っちゃったんですもの。(川端康成『雪国』)

(16) この地獄からのがれるための最後の手段、これが失敗したら、あとはもう首をくくるばかりだ。(太宰治『人間失格』)

(17) 基一郎はそこに歩いていって署名をし、それで参内はおしまいなのであった。もうあとは帰るばかりなのであった。(北杜夫『楡家の人びと』)

例(15)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「入る」である。ほかの要素は「家を建てさせておく」「引っ越し準備をする」などである。一回スキヤニング考察をした結果は、例えば「家を建てさせておく」というデキゴトが完了したということである。時間が経ってからもう一回スキヤニング考察をすると、結果は、例えば「引っ越し準備をする」というデキゴトが完了したということである。何回もスキヤニング考察をすると、結果は、考えられるほかの要素が全部完了し、ただ「入る」というデキゴトだけがまだ完了しておらず、今すぐにでも実行に移せる状態であるということである。つまり、スキヤニング考察が複数回行われ、結果は、ほかの要素がすべて完了し、スキヤニング考察の対象の実行が期待されているが、実際には進行していない、ということである。また、「ばかり」のスキヤニング考察の領域にあるほかの要素はすべて、一つずつ完了し、スキヤニング考察の対象は、ほかの要素に比べ、時間軸の一番後ろにある。すなわち、スキヤニング考察の領域にあるすべての要素は時間順に位置しており、スキヤニング考察の対象は最後にある。このような「ばかり」の用法をアスペクト的用法とする。

もちろん、例(15)では、「ばかり」の用法は複数性明示用法だと考えられないだろうか。何回もスキニング考察をし、その結果がすべて「入る」というデキゴトにたどり着くとも考えられないわけではない。その場合、残された作業は「入る」に限定されるというとりたて解釈も可能である。しかし、本稿で例(15)では、「ばかり」が複数性明示用法ではなくアスペクト的用法とする根拠は、「いざ」という時間的前後関係を示す言葉があるからである。「いざ」という副詞があるために、「入る」というデキゴトはほかの要素との時間的前後関係において把握されている。よって、スキニングの対象領域が時間的前後関係となっているといえる。つまり、例(15)では、意味的条件によって、「ばかり」がアスペクト的用法を表すと考えるのである。「ばかり」自体がスキニング考察をしている点で変わりなく、集合領域内の対象要素が時間的前後関係の時、アスペクト的用法の解釈が生じるのである。このような見方は、「ばかり」の諸用法の連続性を示唆すると考えられる。

例(16)(17)でも同じである。例(16)では、一回スキニング考察をすると、一つの手段を尽くしたという結論にたどり着く。時間が経ってからもう一回スキニング考察をすると、もう一つ別の手段を試したという結論にたどり着く。何回もスキニング考察をすると、たどり着いた結果は、すべての手段を尽くし、これが「最後の手段」という状態である。もしこの最後の手段も失敗したら、スキニング考察の対象「首をくくる」というデキゴトだけが残されている、ということである。つまり、スキニング考察が複数回行われているが、結果は、ほかの要素とスキニング考察の対象がスキニング考察の領域で時間順に位置し、集合内では「最後」のデキゴトにたどりついているということである。例(17)では、何回もスキニング考察をすると、たどり着いた結果は、すべてのすべきことはし、スキニング考察の対象「帰る」が残されているということである。つまり、スキニング考察が複数回しかも最大限行われた結果、スキニング考察の対象はスキニング考察の領域でほかの要素と時間順に並んだ最後の要素として位置しているということである。したがって、例(16)(17)でも、「ばかり」の用法は限定的な解釈も成り立ちうるアスペクト的用法と位置づけられる。

また、例(16)(17)でも「あとは」「もうあとは」というデキゴトの時間的前後関係を示す言葉がある。つまり、意味的条件がある。したがって、例(16)(17)でも、「ばかり」はアスペクト的用法を表すと位置づけたほうが妥当である。

以上からわかるように、「ばかり」の複数性明示用法とアスペクト的用法の違いは、スキニング考察の結果の違いである。複数性明示用法の場合、スキニング考察の結果はある一つのスキニング対象に複数回たどり着く。アスペクト的用法の場合、スキニング考察の結果は、スキニング領域内の要素に、時間順に位置したことである。

3.1.4 比況の用法

「辞書形+ばかり」については、以下のような用例も見られる。

(18) 私の凡てを聞いた奥さんは、果して自分の直覚が的中したと云わないばかりの顔をしましました。(夏目漱石『こころ』)

(19) やがて彼女は、残りの片そでを縫いおわると、「ごらんください。」と言わぬばかりに、それを隣の娘のひぎのそばに置いた。(山本有三『路傍の石』)

(20) すると、学校へ行ってくれるなら、もうどんなことでも、と泣かんばかりであった。(曾野綾子『太郎物語』)

(21) いよいよ艶な女ざかりの風趣が、こぼれんばかりだった。(田辺聖子『新源氏物語』)

例(18)(19)は「否定の辞書形+ばかり」の形である。例(15~17)と似て、複数回かつ最大限スキヤニング考察をした結果、スキヤニング考察の対象「果して自分の直覚が的中したと云わない」「『ごらんください。』と言わぬ」というデキゴトは、ほかの要素「私のすべてを聞いた」「残りの片そでを縫いおわる」などのデキゴトと、スキヤニング考察の領域の中で時間順の序列の最後に位置しており、スキヤニング考察の対象は最後のデキゴトである。よって、「ばかり」の用法はアスペクト的用法と解釈できる。例(20)は「動詞+ばかり」の形である。例(18)(19)と同じように、複数回かつ最大限スキヤニング考察をすると、たどり着いた結果は、スキヤニング考察の対象「泣かん」がほかの要素とスキヤニング考察の領域の中で時間順の序列の最後に位置しており、スキヤニング考察の対象は最後のデキゴトである。よって、同様に「ばかり」の用法はアスペクト的用法と解釈できる。

一方、例(21)では、複数回そして最大限スキヤニング考察をすると、風趣が「こぼれん」程度であるという結果にたどり着く。「ん」の用法は、数多くの先行研究では推量の「む」の「仮定婉曲」用法だと考えられる。本稿では先行研究と同じ立場をとる。つまり、「こぼれん」の表す程度は、こぼれるとしたらそのような程度である。スキヤニング考察の対象「こぼれん」は、ほかの要素「ある」などに比べてスキヤニング考察の領域で程度の高低により位置している。また、スキヤニング考察の対象は一番高程度である。したがって、例(22~25)と同じく、「ばかり」の高程度指示用法(以下で例(22~25)をあげ、詳しく説明する)と解釈できる。

しかし、例(18~20)のような用法は、例(15~17)より、今にもしそうになるという意味が強く出ている。また、例(21)でも、今でもしそうになるという意味が強く出ている。先行研究では、例(18~21)のような用法は比況と呼ばれることが多い。本稿でも、この考え方に従う。比況の用法は、アスペクト的用法と高程度指示用法の両方に解釈できることから、アスペクト的用法と高程度指示用法の中間的なものと位置づけられ、また「ばかり」の諸用法間の連続性を示唆するものだと考えられる。また、「こぼれん」の「ん」は歴史的に「む」に由来することが知られており、歴史的な用法の残存としても現代語の共時的記述においては、「ばかり」の比況の用法は派生的用法と位置づけるのが妥当であろう。

ただし、「動詞+否定+ばかり」のすべての用例が比況を表すわけではない。原因を表す用法「動詞+否定+ばかりに」(例(26~29)で詳しく説明する)の用例は多くないが、一定数見られる。

3.1.5 高程度指示用法

「辞書形+ばかり」については、以下の用例も見られる。

(22) 拍手は天幕もひるがえるばかり、この間デビスはただよろよろと感激して頭をふるばかりでありました。(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)

(23) 真昼の熱気を吸いこんだゲッセマネの灰色の地面にうずくまり、眠りこけている弟子たちから一人離れて、「死ぬばかり苦しみ、汗、血の雫の滴った」あの人の顔を司祭は今噛みしめる。(遠藤周作『沈黙』)

(24) 私は、そのあふれるばかりのちからを駆って、私自身にはきょうだいたちの亡霊ときっ

ぱり訣れた記念として、肉親たちにはたのもしい道づれの証拠として、なにか有益な事を起こそうと思ったのであるが、非力な私にはなにほどのことも思いうかばなかった。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

(25) 鴨居に届くばかりの巨体も、薄く髭の生えた童顔も、張った肩も二カ月前と変わらない。(渡辺淳一『花埋み』)

例(22)では、「ばかり」が二回使用されているが、一回目の「ばかり」に注目する。スキヤニング考察の対象は「天幕もひるがえる」である。拍手はどんな様子か?という課題に対し、一回スキヤニング考察をすると、「天幕もひるがえる」にたどり着く。しかし、「天幕もひるがえる」というデキゴトは、実際には行われていない。「天幕もひるがえる」は程度を表す語句である。スキヤニング考察の領域に考えられるほかの要素もすべて程度を表す語句である。例えば、「響く」「少ない」などである。また、「天幕もひるがえる」はほかの要素「響く」「少ない」などより程度が高い。すなわち、スキヤニング考察の領域にあるすべての要素は程度の高低により位置しており、スキヤニング考察の対象が最も程度が高い。また、例(22)は拍手の状況を描写しているので、発話時前後で、状況が頻繁に変わることは考えられない。よって、最大限、何回スキヤニング考察をしても、結果はスキヤニング考察の対象にたどり着く。本稿では、例(22)のような用例を高程度指示用法と呼ぶことにする。

また、丸山(2001)では、「ばかり」の表す程度は、〈高程度〉しか表わさないと述べている。つまり、「ばかり」は低い程度でも普通の程度でもなく、高程度を表す。論者の、「ばかり」は高程度を指示するという用法の定義は、丸山(2001)の主張と一致する。

例(23~25)でも同じである。例(23)では、どのように苦しんだか?という質問に対し、一回スキヤニング考察したら、結果はスキヤニング考察の対象「死ぬ」になる。しかし、実際に死んではいない。これは程度を表す語句を成している。スキヤニング考察の対象は、考えられるほかの要素「かなり」「すこし」などとともスキヤニング考察の領域で程度の高低により位置している。そして、スキヤニング考察の対象はもつとも程度が高い。また、例文は事実を描写しているので、発話時前後において、「死ぬ」程度が変わることは考えられない。よって、スキヤニング考察が何回行われても、結果は「死ぬ」にたどり着く。したがって、例(23)は高程度指示用法である。例(24)(25)では、スキヤニング考察をすると、結果は「あふれる」「鴨居に届く」になる。例文は事実を描写しているので、発話時前後で、「あふれる」「鴨居に届く」程度が変わることは考えられない。つまり、スキヤニング考察が何回行われても、スキヤニング考察の対象にたどり着く。スキヤニング考察の領域の中で、すべての要素は程度の高低により位置しており、「あふれる」「鴨居に届く」が一番高程度である。よって、例(24)(25)でも、「ばかり」の用法は高程度指示用法といえる。

また、高程度指示用法の用例は、「辞書形+ばかり+述語」と「辞書形+ばかり+の」の形の例文に集中している。つまり、連用修飾句と連体修飾句をなす強い傾向がある。

3.1.6 原因の用法

「辞書形+ばかり」については、以下の用例もある。

(26) 嬉しい一方で、胸ふたがるばかりにお別れが辛うございます。(田辺聖子『新源氏物語』)

(27) 詩も女も、凡そ好きなものは総て遠ざけられ拒否され、他人なら、そのまま絶交して別れて行くことも、口出すなどと言って反対した当の相手を刺すこともできるのだが、親であるばかりに、彼はそうもできなかつた。(曾野綾子『太郎物語』)

(28) 鮎太は一刻も早くこの場を逃れたいばかりに、そう返事をした。(井上靖『あすなる物語』)

(29) こんなにも天上の、楽園の、永遠の愛を夢想する僕も、ただ神を信じていないばかりに、千枝子の眼からは単なる不法の人としか思われまいだろう。(福永武彦『草の花』)

例(26~29)はすべて、「辞書形+ばかり+に」の形である。例(26)では、事実を描写しているので、「胸ふたがる」が変わることは考えられない。また、「胸ふたがる」は、考えられるほかの要素「すこし」などより、程度が高い。つまり、ここでも、最大限何回スキニング考察をしても、結果はスキニング考察の対象にたどり着くと位置づけられる。また、スキニング考察の対象は、考えられるほかの要素とともにスキニング考察の領域の中で程度の高低により位置しており、スキニング考察の対象はもっとも高程度である。よって、例(26)では、「ばかり」の用法は高程度指示用法と解釈できる。

例(27~29)は、例(26)と類似している。しかし、「ばかり」の用法は高程度指示用法というより、原因を表しているといったほうが妥当だろう。例(27)では、「親である」は、考えられるほかの要素「友達である」などより、責任があり、背負うものが一番多いので、程度が高い。また、背負うものが多く、「そうもできなかつた」。すなわち、程度が高いために、後続する述語句の原因となりうるわけである。例(28)では、「一刻も早くこの場を逃れたい」は考えられるほかの要素より程度が高い。しかし、気持ちが強いからこそ、それが「そう返事をした」原因になる。つまり、原因となりうるわけである。例(29)も同じである。

例(27~29)のような「ばかりに」の原因を表す用法を、「ばかり」の派生的用法とする。高程度指示用法とも解釈できるが、原因を表す用法としたほうが適切である。

3.1.7 まとめ

以上のように、本節では「動詞の辞書形+ばかり」の用法を考察した。動詞の辞書形に下接する「ばかり」は、複数性明示用法、アスペクト的用法、高程度指示用法に分類することができる。各用法に分類する条件は、スキニング考察の結果と、スキニング考察の領域にある各要素の配列基準の違いである。また、「ばかりか」の用法、「動詞ん+ばかり」などが表す比況と、「ばかりに」が表す原因の用法は、「ばかり」の派生的用法と位置づけられる。

「動詞辞書形+ばかり」では、複数性明示用法で使われる場合、「辞書形+ばかり+で/が/だ/であるなど」の例、または文の終わりに位置する例が圧倒的に多い。すなわち、述語をなす傾向が強い。「ばかり」が高程度指示用法で使われる場合は、「辞書形+ばかり+の」「辞書形+ばかり+述語」の用例が圧倒的に多い。すなわち、連用修飾句と連体修飾句をなす傾向が強い。以上のように、構文によって「ばかり」の用法には偏りが見られる。

3.2 「タ形+ばかり」

「タ形+ばかり」については、以下のような用例が見られる。

(30) 長官は愕然、死なれちゃ困る。元も子もなくなる。復讐は、いま始まったばかりではないか。(井上ひさし『ブンとブン』)

(31) 「たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかで御座います」と奥さんは気の毒そうに云ってくれた。(夏目漱石『こころ』)

(32) 五年生になったばかりのかの女は、おさない頭脳と小さなからだで、むりやり一家の主婦の役を受け持たされているのだ。(壺井栄『二十四の瞳』)

例(30)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「復讐は、いま始まった」である。ほかの要素は、例えば、「計画を実行する」などである。一回スキヤニング考察をすると、結果はスキヤニング考察の対象「復讐は、いま始まった」というデキゴトになる。時間が経ってから、もう一回スキヤニングしても、結果は、ほかの要素「計画を実行する」というデキゴトがまだ実行されていない。最大限、何回スキヤニング考察をしても、たどり着いた結果は、唯一「復讐がいま始まった」のみが成立し、ほかの要素がすべてまだ実行されていない状態だということである。つまり、スキヤニングが複数回最大限行われても、その結果は、スキヤニング考察の対象「復讐は、いま始まった」が一番初めのデキゴトで、そのあとに、ほかの要素「計画を実行する」などは実行されていない、ということである。また、スキヤニング考察の対象「復讐は、いま始まった」とほかの要素「計画を実行する」などは、スキヤニング考察の領域で時間順に位置している。また、スキヤニング考察の対象は唯一実現した、ゆえにタ形で表されるデキゴトである。したがって、例(30)のような「ばかり」の用法をアスペクト的用法とする。

また、例(31)(32)も同じである。何回スキヤニング考察しても、その結果は、初めの一回のスキヤニング考察と同じで、スキヤニング考察の対象「出た」「五年生になった」という結果に達する。そのあとに複数回最大限スキヤニング考察をしても、「出た」「五年生になった」のみが成立し、ほかの要素がすべて実行されていないという結果にたどり着く。また、スキヤニング考察の対象とほかの要素は、スキヤニング考察の領域で時間順に位置しており、スキヤニング考察の対象は唯一実現したのデキゴトである。したがって、例(31)(32)では、「ばかり」の用法はアスペクト的用法である。

従来、「タ形+ばかり」はすべて「直後」を表すアスペクト的用法とされてきたが、以下のような例外がある。

(33) あの日、伯母様の家の一間で、あの人と会った時に、私はたった一目見たばかりで、あの人の心に映っている私の醜さを知ってしまった。(芥川龍之介『袈裟と盛遠』)

(34) この前は、ただ挨拶に来たばかりで、すぐに隆土と町に出て行ったから、ほとんど話をしていない。(三浦綾子『塩狩峠』)

例(33)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「たった一目見た」である。どれくらい見て、あの人の心に映っている私の醜さを知ったか?という課題に対し、何回スキヤニング考察をしても、その結果は「たった一目見た」である。例(33)では、「たった一目見た」とほかの要素が時間的に前後の関係であるということを取りたてているのではなく、「ばかり」によって「たった一目見た」を限定している。したがって、例(33)の「ばかり」の用法は限

定用法だと考えられる。

また、例(34)も同じである。「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「ただ挨拶に来た」である。「挨拶に来た」とほかの要素「隆土と街に出て行った」が時間的關係であるということとは強調されておらず、「ただ挨拶に来た」というデキゴトをとりたてている。したがって、例(34)は限定用法だと考えられる。

例(33)(34)のような用例の数は多くないが、一定数見られる。また、「ばかり」が限定用法で使われる場合、「たった」「ただ」と共起することが多いことがわかる。

以上のように、「タ形+ばかり」の用法を詳しく考察した。多くの場合、「ばかり」の用法はアスペクト的用法であるが、「たった」「ただ」等と共起する限定用法の場合もある。しかしいずれの場合も、複数回、最大限のスキヤニング考察において、唯一の事態の実現が結果として把握されるという点で共通している。

3.3 「テ形(ているも含む)+ばかり」

「テ形(ているも含む)+ばかり」については、以下のような用例が見られる。

(35)「うん、それはあるんだが、どれに手をつけても、そう直ぐは物になりそうもないんで、愚図愚図してうんだ。どうも勇気がなくて駄目だよ」「あんまり怠けてばかりいるからだ。
(志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』)

(36) うっとうしい世の中になってしまっただね。いやな連中がのさばり返っているばかりだ。
(田辺聖子『新源氏物語』)

(37) 車の去ったあとには一枚の平たい布が道にしがみついているばかりだった。(開高健『巨人と玩具』)

(38) 一面の朧な月明りに隣の棟の建物が森閑と控えているばかり、人影は見えなかった。(福永武彦『草の花』)

例(35)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「怠けている」である。普段どうしているか?という課題に対し、一回スキヤニング考察をしたら、結果は「怠けている」になる。最大限、何回スキヤニング考察をしても、結果は「怠けている」にたどり着く。したがって、例(35)では、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。

例(36~38)も同じである。何回スキヤニング考察しても、結果はスキヤニング考察の対象「いやな連中がのさばり返っている」「一枚の平たい布が道にしがみついている」「隣の棟の建物が森閑と控えている」にたどり着く。「ばかり」の用法は複数性明示用法である。

以上に示したように、「テ形+ばかり」の場合、「ばかり」の用法はすべて、複数性明示用法である。

4. 結論

以上のように、本稿では、スキヤニング考察という概念を用い、動詞(句)に後接する「ばかり」のあらゆる用法を新たに分類した結果、以下のように結論づけた。

動詞(句)に後接する「ばかり」の基本的な用法は複数性明示用法、高程度指示用法とアス

ペクト的用法である。限定用法は統語的条件を要するので、基本的な用法ではない。「ばかりか」の限定用法、「動詞ん＋ばかり」など比況を表す用法、「ばかりに」の原因を表す用法は、「ばかり」の派生的用法である。各基本的な用法の成立条件は以下のとおりである。

- スキャニング考察の結果がスキャニング考察の対象の時：
 - スキャニング考察の対象とほかの要素が、スキャニング考察の領域で、特定の関係で位置していない場合、「ばかり」の用法は複数性明示用法となる。
 - スキャニング考察の対象とほかの要素が、スキャニング考察の領域で、程度の高低により位置している場合、「ばかり」の用法は高程度指示用法である。
- スキャニング考察の結果、デキゴトがスキャニング考察の領域で時間順に位置している場合、「ばかり」の用法はアスペクト的用法である。

また、「ばかり」に前接する動詞（句）の違いにより、各用法に強い偏りがある。「辞書形＋ばかり」が、主語もしくは述語をなす場合、「ばかり」の用法は複数性明示用法に強く偏る。連体修飾句や連用修飾句をなす時、「ばかり」の用法は高程度指示用法に強く偏る。「タ形＋ばかり」の場合、「ばかり」の用法はアスペクト的用法に強く偏る。「テ形＋ばかり」の場合、「ばかり」の用法はすべて複数性明示用法となる。

さらに、以上の考察から各用法の連続性も明らかになった。複数性明示用法と高程度指示用法の共通点は、スキャニング考察の結果がスキャニング考察の対象であるということである。アスペクト的用法と複数性明示用法の連続性は、文中に「いざ」や「あと」などのような言葉がある場合、つまり、意味的条件がある時に、集合内の要素の関係は時間的前後関係ということができ、複数性明示用法での解釈より、アスペクト的用法での解釈が成り立ちやすいということである。また、アスペクト的用法と限定用法の連続性は、「動詞タ形＋ばかり」の形式で、文中に「ただ」や「たった」のような語句がある場合、つまり、統語的条件がある時に、アスペクト的用法を表すはずの「ばかり」が限定用法を表す点にある。さらに、原因を表す「ばかりに」の用法も、アスペクト的用法と高程度指示用法の連続性を示している。

今後は、ほかの品詞に後接する「ばかり」のあらゆる用法についても考察し、すべてを一貫したスキャニング考察という観点から新しく分類し統一的な記述説明を与えたいと考えている。

参考文献

- 庵功雄 (2001) 「とりたて」『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 定延利之 (1999) 「語られるスキヤニング、語るためのスキヤニング」『国際文化学』創刊号、神戸大学国際文化学会
- 定延利之 (2000) 「スキヤニング概念を利用した、現代日本語接尾辞『おき』の曖昧性の統一的説明」『認知科学』7 (3)
- 定延利之 (2001) 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1巻1号
- 定延利之 (2003) 「現代語の限定のとりたて」沼田善子 (他) (編) 『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 中西久実子 (1995) 「取り立て助詞「ばかり」の限定機能—その複機能と単機能との連続性を中心に—」『大阪大学日本学報』14
- 中西久実子 (2001) 「単数のものをとりたてる「ばかり」の意味再考—教育の視点から—」『日本語と日本語教育』第30号、慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 仁田義雄ほか (2009) 「第9部とりたて」『現代日本語文法5』日本語記述文法研究会編、くろしお出版
- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』第44巻第13分冊、大阪市立大学文学部
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」奥津敬一郎 (他) 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」金水敏 (他) 『日本語文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
- 前田直子 (2001) 「「～したところだ」と「～したばかりだ」」『東京大学留学生センター紀要』第11号
- 丸山直子 (2001) 「副助詞「くらい」「だけ」「ばかり」「まで」の、いわゆる(程度用法)と(とりたて用法)」『日本文学』95号、東京女子大学日本文学研究会
- 宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪郭』三省堂
- 張培 (2011) 「現代語ダケの諸用法について—『形容詞・形容動詞+ダケ』を中心に」『名古屋大学人文科学研究』第40号

用例出典

『新潮文庫の100冊』CD-ROM版